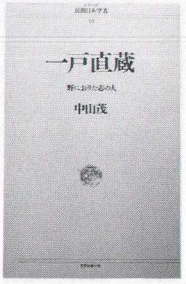

一戸直蔵　野におりた志の人

中山　茂　リブロポート，1989年
（シリーズ民間日本学者19），1400円

専門書

お薦め度
☆☆☆☆☆

依頼もされていないのに，書評を書いてしまった．こんなことは始めてだ．本書は，明治から大正を一気に駆け抜けた烈火の研究者，一戸直蔵の伝記である．あなたは一戸を知っていただろうか？　なぜなら，彼は，日本天文学会を立ち上げた真の功労者でありながら，明治アカデミズムの前に砕け散り，公の歴史から消された男だからだ．

ぼく自身も，数年前に初めて，一戸直蔵の名前にぶつかった（天文月報，1991，7，230）．そして，最近になって，たまたま，学生が，上記の本を教えてくれた．そこには，『天文月報』など公の資料をみて想像していたより遙かにすごい人間がいた．著者の中山氏は，“一戸の生涯は科学者にしては波乱に満ちているので，奇人伝とすることは避け，できるだけオーソドックスな伝記にしたい”と思ったそうだ．その通り，淡々と事実が書いてあるにもかかわらず，その，あまりに激しい生の燃焼に，読んでいて，鬼気迫るものがあった．

一戸直蔵，1878年に本州最果ての地，津軽に生を受け，紆余曲折を経ながら，東京帝国大学星学科へ入学，さらに当時，新しい天文学の勃興期であったアメリカへ私費で留学し，（おそらく日本で初めて）天体物理学を修得して帰朝し，すぐさま東京帝国大学講師となった．29歳のことである．

その後の活躍はすさまじい．日本天文学会の創立，天文月報の創刊．研究者がアカデミズムのコミュニティに閉じこもっていた時代にあっての精力的な啓蒙活動（研究者としても精力的に仕事をし，異例の早さで，星学科で最初の論文博士を得ている）．また，新天文台候補地としての台湾の新高山調査行（これは半世紀後に岡山天文台に実を結ぶ），国際的な天文発見電報同盟への加盟のお膳立て，1910年に回帰したハレー彗星の大連観測のプロモート，無線報時の実用化，太陽観測所の計画などなど，一戸直蔵の押し進めた学問事業は枚挙にいとまがつきない．しかも，これら数々の事業を，表に出ることなく，裏で立ち働いた．

しかし，壮大なビジョンのもと，学問を押し進めるため，歯に衣着せずに正論をずけずけ言う一戸を権力者がよく思うはずはない．とくになんら学問的業績もない官僚台長，寺尾寿にとっては，目の上の大たんこぶだったらしい．ついに，1911年，麻布にあった東京天文台の移転問題の対立を期に，パージされ天文台を追われたのである．

職を奪われ学界から締め出されたことは，大きな挫折ではあったが，あくまで行動の人，一戸直蔵である．野に下ってからは，日本版ネイチャーをめざして『現代之科学』Scientific Gazetteを創刊し，反アカデミズムの科学啓蒙家として腕を奮っていく．しかし留学時代からの長年の無理がたたり，1920年，42歳という若さで，志し半ばにして斃れたのである．明るい告別式であったという．

彼の行動原理は，中山氏によると，“単なる出世や名を竹帯に垂れるという態の自己顕示欲ではなく，コーリング（召命）とでもいうのか，志を持って事にあたり，それを自らに使命として課す，一種のアルトゥルーイズム（利他主義）”だそうだ．

あぁ，現代日本天文学界の黎明期には，こんなスゲー奴がいたんだ，ガンバラナクッチャ，とつくづく思ってしまう．研究が1日ぐらい遅れてもいいから，是非，一度読んで欲しい本である．

福江　純（大阪教育大）